

石原 広子

(石原広子朗読の会)

## 『冒頭の読み方』

作家は書き出しを工夫する。朗読者も第一声をどのように出すかでその後の読みが決まってくる。作品によっていろいろな書き出しのパターンがあるようである。

(一) 時を指定してから始まる

ある曇った日である。 芥川龍之介作『蜜柑』

明治十九年十一月三日の夜であった。

” 『舞踏会』

それはまだ人々が「愚」という尊い徳をもつていて、世の中が今のように激しく軋み合わない時分であった。

谷崎潤一郎作『刺青』

(二) 会話から始まる

「お京さんいますか」と窓の戸の外に来て、ことごとと羽目を鼓く音のするに、

樋口一葉作『わかれ道』

「ほら、一羽だけ白いかもがいるでしょう。あれ

は呼ぶと来るんですよ。」 室生犀星作『白い鴨』

「おい、この間、三の酉へ行つたらう?」 「ズケ

リといって、ぼくは、おさわの顔をみたのである

久保田万太郎作『三の酉』

(三) 心象風景から始まる

えたいの知れない不吉な魂が私の心を終始圧えつけていた。

梶井基次郎作『檸檬』

ぼくは小さい時に絵をかくことが好きでした。

有島武郎作『一房の葡萄』

桜が散って、このように葉桜のころになれば、私は、きつと思ひ出します 太宰治作『葉桜と魔笛』

この他、状況説明、一人語り、場所の説明、俳句や詩歌の言葉引用したりなどして入るいろいろな場合があるようである。

(一)の中から

『蜜柑』

「ある曇つた冬の日暮れである。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下ろして、ぼんやり発車の笛を待つていた。とうに電燈のついた客車の中には、珍しく私のほかに一人も乗客はいなかった。外を覗くと、うす暗いプラットフォームにも、今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶つて、ただ、檻に入られた小犬が一匹、とどき悲しそうに、吠え立てていた。これらはその時の私の心もちと、不思議なくらい似つかわしい景色だった。私の頭の中には言い

ようなない疲労と倦怠とがまるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落としていた。」

ある曇つた冬の日暮れである……ではつきりした時が示されている。ここで言い切つて間を取ることにそれに続く文章は日暮れというはつきりしないぼんやりとした不確かな夜の暗さに向かつて行く不安が、主人公の現在の気持ちとびつたりしていることが書かれているのでその気持ちでしつかり読んでほしい。ここがはつきり押えられないと後半のあざやかな蜜柑の色彩と一時の心の晴れ具合の対称と時間の経過が出てこない。冒頭の読みの大切さがここににある。

(二)の中から

『三の酉』

「おい、この間、三の酉へ行つたらう？…ズケリといつて、ぼくは、おさわの顔をみたのである。

ええ、行ったわ。…どうして?…

と、おさわは、大きな目を、くるつとさせた。

しかも、白昼、イケしやアしやアと、男と一

しよに、よ…と、ぼくは、カセをかけた。

あら、よく知ってるわね。

と、そのくるつとさせた目を、正直にそのまま、

おかしいわ。

と、改めて、ぼくのほうにうつした。

ちつともおかしかアない。…おかしいのはそ

ちだ…

みたの、あなた、どつかで?…

そうだろうナ、多分…」

会話から文章に入る小説もかなり多いが、冒頭で人物や場所の説明がないので、後から書かれてある場所や人物像を作つてから会話に入る必要がある。

どんな場所で、どんな状況で、何才ぐらいのどんな人物が話しているかをまず押さえておく必要がある。

りそうだ。そうでないと、会話の内容がまったく見えてこないことになってしまふ。これでは聞いていてもおもしろくないし、大事なことは最初に聞き手の関心をつかむ必要があるのでそれに失敗してしまふことになる。

(三)の中から

『檸檬』

「えたいの知れない不吉な魂が私の心を終始圧えつけていた。焦燥といおうか、嫌悪といおうか

酒を飲んだあとに宿酔があるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に担当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかつた。結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。いけないのはその不吉な魂だ。以前私を喜ばせたどんな美しい時の一説も辛抱がならなくなった。蓄音機を聴かせてもらいにわざわざ出かけて行つても、最初

の二、三小節で不意に立ち上がったしてまいたくなる。何か私をいたたまらずさせるのだ。それで終始私は街から街を浮浪し続けていた。」

主人公はどんな性格の人物か、職業は何か。どんな家庭環境なのか、どうしてえたいの知れない不吉な魂が心の中に潜んでいるのかを考えてみる。そういう人物はどんな声のトーン（調子）を持つのだろうか、年齢は？、背格好は？など興味は尽きないはずである。答を勝手に作るのではなくできるだけ書かれている文章の中から拾うことが大切である。答は文章の中に書かれていることが多いが、時には同じ作者の違う作品からヒントを得ることもある。それらの作業をしてから声を出してみよう。

前にも書いたが冒頭の一節は全体の流れを決めるのでとにかく大切であることを心に銘記して頂きたい

そしてもし、表現が違っていることに途中で気付

いたら途中からでも方向修正しなくてはならない。その時は、無理に変えよう変えようとしなくてじつと我慢して本の中に出るだけ入りこもつことである。本の方から近づいてくれるのを待つことである。これはなかなかむづかしいのであるがこれしかなく、方法はいかに集中力があるかが試されることになる。集中力の涵養はこれはまた別の機会に述べたいと思う。